



TITLE:

<研究の周辺> 一研究者のつぶやき

AUTHOR(S):

大貝, 健二

---

CITATION:

大貝, 健二. <研究の周辺> 一研究者のつぶやき. 資本と地域 2007, 4: 61-62

ISSUE DATE:

2007-10

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/66163>

RIGHT:

<研究の周辺>

「一研究者のつぶやき」

大貝 健二

『資本と地域』は、2007 年度で第 4 号を数える。創刊号から編集委員として、企画をはじめ、紀要作成に携わせてもらっている。当初から、紀要の柱の一つに、日々研究をしながら考えていること、共有すべき情報を何らかの形で掲載したい、ということがあった。例に違わずというわけでもないが、私自身が研究生活を送りながら考えていること、悩んでいること、反省していることを綴ってみることにしたい。読まれている方の中には、ここで私が書いていることが、ごく当たり前であり、非常にレベルが低いと感ぜられるかもしれない。しかし、これが私の現段階であり、さらに上を目指すためにも、恥を忍んで敢えて自分をさらけ出す覚悟である。

簡単に、私が研究していることを紹介しておきたい。大学院入学前から関心があるのは地場産業である。一概に地場産業と言っても、西陣や桐生に代表される繊維製品、美濃、有田、信楽などの窯業、府中、高山、大川などの木工品(家具)など枚挙に暇が無い。その中で私は、金属加工に携わっている地域、特に金属洋食器やハウスウェアの生産で知られている新潟県の燕市を中心とする県央地域や、ポケットナイフや、包丁、ハサミ、カミソリなど、刃物製品を生産している岐阜県の関市を中心とした産地に目が向いている。

高度経済成長期に、これら 2 つの産地は主にアメリカ市場への輸出によって存在感を示してきた地域であるが、これらの産地が 1985 年のプラザ合意以後、どのように外的環境の変化に対応してきたのか、を研究している。

さて、そんな私の 2008 年 1 月 24 日現在のつぶやきを記していこうと思うのだが、私、気がつけばもう D3 を迎える。D1 の一年間は、学会発表や投稿論文の手直しに追われた一年だった。D2 は、研究室での様々な仕事をまかされる立場になり、それらの仕事の段取り等を覚えること、ソツなくこなすことに精一杯であり、研究の方は…? と人に言えた話ではない。

D1 の一年間はさておき、D2 のこの一年間、研究面での成果を出し切れしていないこと、ここに今回私が筆をとった最大の動機がある。この一年間何をしていたのか? 気が滅入る反省点である。今更ながら、自分で自分の舵取りをすることの難しさを実感している。

自分の研究の傍ら、京都中小企業家同友会で実施している景況調査に、微力ながら関わらせて頂いている。同友会会員企業に送付されたアンケートの分析、報告書の作成までが仕事である。

景況調査では、2-3 回に一度、特別調査項目として、「各企業の経営指針は明確に立てているか」、という設問が立てられる。この経営方針というもの、要は経営理念、経営計画、経営方針の 3 本を柱としているが、私たちの世界で言えば、研究目的と研究計画、そして研究方法ということでもなるだろうか。この設問に対し、「毎年更新している」、「以前に作成したものがある」、「作成したことが無い」という回答項目があり、有効サンプルはほぼ 30% ずつに回答が割れる。単純集計で見れば、ただそれだけのことである。しかし、この「経営指針の有無」と「業況判断」、及び「業況水準」とクロスさせてみると、面白い結果が表れてくる。つまり、経営指針を毎年作成している企業ほど、業況が好転し、及業況は良いという回答割合が高くなり、反対に、経営指針を作成したことがない企業ほど業況は悪い、という回答が高くなっているのである。この結果に至る理由は極めて明白であり、京都同友会でも経営指針の作成を徹底する運動がなされている。

同じことが我々研究者を目指すものにとっても当てはまるのではないかと、景況調査の分析をしながら、また実際に社長さん達と話をしながら思うのである。(私自身の) 今年一年の目標、目標を達成するための綿密な計画と方法は…、と今もこの文章を書きながら考えている。お世辞にも、よく出来たものなんて言えやしない。年度の初めに豪語していた、「1 年 2 本の論文執筆」は、どうなった? …答は自ずと明らかになるだろう。

D2 の一年間を通じて、こんな結果に半ば陥っているのは、誰のせいでもない。他ならぬ身から出た錆である。計画の甘さ、目標の不徹底、先行きの見通しの甘さにある。今さらながら、一年間の自分を振り返って、どこか中途半端な自分自身を実感している始末である。情けない。しかし、過ぎたことを「あーだ、こーだ」言うことは、簡単である。言っていれば良いだけだ。何の発展も無く、同じことをくり返すだけだ。

自分自身を、どげんかせにやいかんのです。

日本の大学院の制度が大きく変化し、課程博士が当たり前になる状況の中で、公募の際には、博士論文の有無が一つの基準になっているという。一定の論文数が無いと、どうにもならない状況になっている。もちろん、こうした成果主義が、内容が(ほとんど)無い、どうでも良い、薄っぺらな論文の量産を助長していることは紛れも無い事実である。

この現状を前にして、周りに対して文句を言いたくなる気持ちは、誰だって同じである。しかし、この世界で生きて行こうと思う限り、我々の側でも現状の制度、環境に対して反発するだけではなく、現状に適応させていくことが必要なのではないかと考える。

そのために、適当な研究計画・目標ではなく、戦略

的な研究計画を、時間を割いて検討する必要があるのではないかと考えている。特に、この一年間を反省することしか無い私の場合はそうである。自分が目指す博士論文の構想、理論的支柱、仮想敵を考えながら、各論のテーマを設定し、仮説を立て、それを実証するための資料収集・分析、ヒアリングの実施…、当初想定した「1年間に2本」を考えるならば、半年に1本がノルマとなる。かつこれらの成果が、所属している学

会で報告できるように、リミットを定められることが理想的なのだろう。これらに併せ、学会関係をはじめとする事務仕事をこなしていかなければならないと考えると、やはり「研究は計画的に」である。

一年後、笑っている自分がいるか、暗く落ち込んでいる自分がいるか、確かめて頂ければ幸いである。

(京都大学大学院)

## 研究活動報告 II

### 地域経済研究会

2006年11月18日(土)

○池田清氏(下関市立大学)

「地域(都市)の創造と伝統」

○堀富士夫氏(岐阜経済大学副理事長)

「郷土力を活かす、持続可能な市街地再生」

2007年1月27日(土)

○手嶋隆行氏(京都大学公共政策大学院)

「『まちの駅』について」

○相楽美穂氏(立命館大学)

「木製品の材料に関わる情報の確認機会喪失とその再生」

2007年4月7日(土)

○宇都宮千穂氏(京都大学大学院)

「新居浜市の形成と生活空間」

○槌田 洋氏(日本福祉大学)

「雇用保障型世界都市～スウェーデン地域経済の構造転換」

○横山 隆氏(八尾市役所)

「八尾市を事例とした企業誘致について」

2007年6月16日(土)

<午前部>

○小山大介氏(京都大学大学院)

「現代多国籍企業の貿易構造－企業内世界分業体制の構築過程－」

<午後部>

○高田茂弘氏(毎日新聞社)

「合併を拒否した自治体――三つの事例から」

○梅原浩次郎氏(愛知産業大学)

「大都市圏改革と自治体経営戦略－名古屋市を事例に－」

○名和洋人氏(京都大学大学院)

「灌漑用水開発と外国人農業労働者

－カリフォルニア州の開墾事業対象地域における事例から－」

2007年8月4日(土)

【地域経済研究会シンポジウム】

○水島和哉(京都大学大学院):「景観変遷と消費分析にみる都市形成史」

○三輪 仁(京都大学大学院):「産業分析の地域経済学的アプローチ」

○宇都宮千穂(京都大学大学院):「都市形成と生活空間」

○池島祥文(京都大学大学院):「都市・農村間関係の再検討」